

て平家一篇の詩は終つて居るやうに味ふことも出来る。併し「灌頂の巻」は別の事としてもどうも平家物語全篇の調子が三度變つて弱い音から強くなつて強い音が様々に亂れて、それから急轉直下すと沈んだ音になつて行く音樂のやうに思はれるのである。さうすると我々がまとまつた文章として流布本を讀む時には、その變化を認めることが出来るのではないかと思ふ。かういふ感じの上から平家物語を味ふ時に以上の二つの學說に對して、我々の印象を主としてこの感想を述べて見たのである。「文學批評」上の根本問題に就いて多少の疑問を懷きながら、この考をのべて教へを乞ひたいと思ふのである。

(文三、重松、渡部、赤木、重松)

□奈良 良

嫩草山も 春日野も 霞こめたる 春景色、
舊き都の 名残さて 花は昔の 色にさく。
古人曰へらく、

「奈良七重、七堂伽藍八重櫻。」

大佛殿に 佛燈の

光は今も

輝きて、

正倉院は 天平の

昔をかたく

封じたり。

古人曰へらく、

「虫干や、甥の僧訪ふ東大寺。」

鹿の鳴く音に誘はれて

三笠の山を

放れけん、

満月早く 猿澤の

池の水の面に浮びたり。

古人曰へらく、

「仲麿の魂祭せん、今日の月。」

佐保の川原は水あせて

石にさくやく音靜か、

願みすれば 葛城の

山の嶺

雪白し。

古人曰へらく、

「大佛を見かけて遠き冬野哉。」

御馬の嘶

尾上柴舟

木の葉散る音だにもせぬ大御苑かすかに駒の嘶きこゆ
神ながら神さびせすとわが大君冬の御苑に駒みそなはず
大君の御目に入らむと音たかく嘶え足掻き駒ぞいさめる
しとくゝと駒を砂ふむあやつりの人形のごと足をあげつゝ
赤駒に黒駒つゞさうちめぐる馬場の上をわたるかりがね
風のごと駒の走れば春霞流るゝなして母衣ぞ流るゝ
いくそたび駒は廻れどあらかねの土には這はずあはれその母衣
鐘鼓一つに鳴れば四十人ははやり切りたる駒うち放つ
駆けちがふ駒のあし音たじくゝに雹や戸をうつあらず球うつ
駒と駒さを争ひ蹴立つれば馬場の真砂雪のごと散る